



課題提起

第8回FLECフォーラム＋ クロージングシンポジウム

2026年2月1日（日）

社会福祉法人麦の子会 理事長 北川 聡子

違う施策として位置付けられてきた

こどもの教育と支援が、**違う政策**で進められてきた。そのため、**障害のないこどもとあるこども**など、多様性があるこども同士が**理解しあえる場がまだ限られている**。

こども子育て施策



障害児施策



こども家庭庁ができたことは画期的なこと

知らないことからくる偏見や差別ある

- 共に過ごす機会や理解しあえる機会がなかった結果、**差別や偏見につながる要因**となっている。残念ながら大人になってから障害のある方と地域で共に過ごすことが難しくなってしまった事例もある。
(グループホーム建設反対運動など)

インクルーシブ保育と育ちの保障

こどもにとっては、同じ場所で共に遊び育ちあうインクルーシブ保育が必要

こども観・人権観のアップデート

- 能力主義（エイブリズム）からの脱却
- すべてのこどもの人権と尊厳が守られる事ーリスペクトされた環境はそのこどもの持っている力が開花する

みんなにとって居心地のいいと思える地域

- ▶ 市民教育としてのインクルーシブ（フランス）

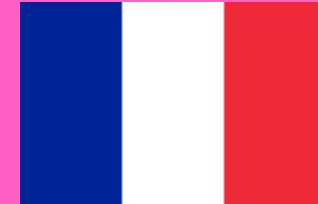
福祉

- ▶ より良い社会・歴史をつくる



こどもにどんな風に育ってほしいかー自分と違った相手もリスペクトできる人に、よい世の中や国をつくる担い手に（イタリア幼児教育担当者）

保育は元来から「インクルーシブ」な理念を含有しているものである（日本）



フランス 20年間の 法的進化

個人の権利から
社会のシステムへ

2005年

統合 (Integration)

アクセス権の保証「すべてのこどもが近隣の学校へ」

2013年

包摂 (Inclusion)

学校の責任「こどもではなく学校が変わる」

2019年

インクルーシブ学校 (Inclusive School)

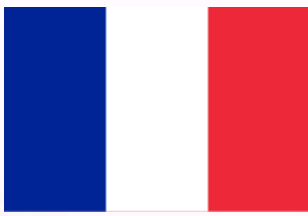
公的システムの構築「県レベルの支援組織化」

2024年

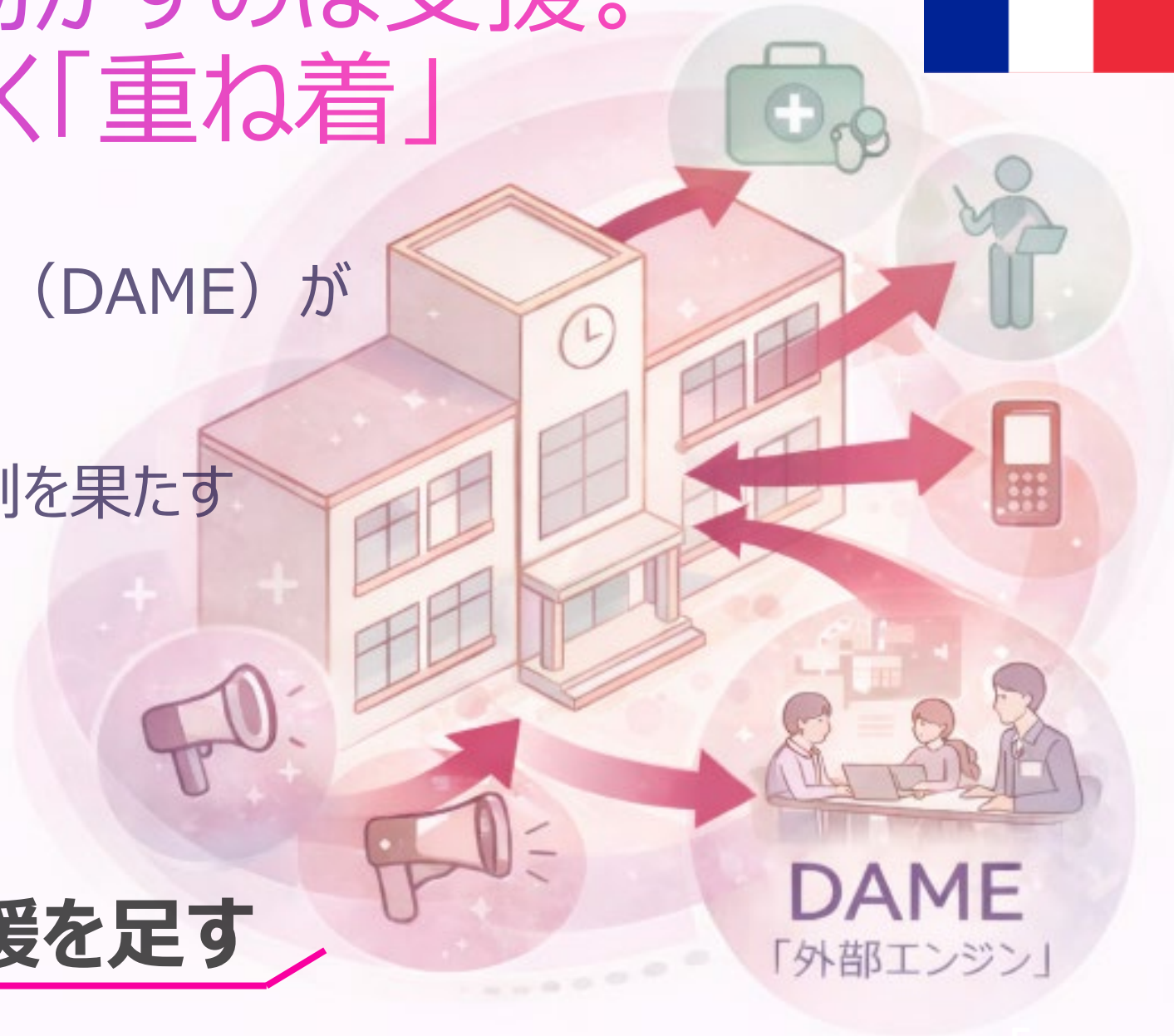
みんなの学校 (School for All)

例外ゼロ 「『所属なし』の廃止」

こどもは動かさない。動かすのは支援。 支援は「階段」ではなく「重ね着」



福祉（医療・教育的）・専門チーム（DAME）が
学校に出向き、
こどもを分離することなく、
学校内で「外部エンジン」としての役割を果たす



支援に困ったら、学校に支援を足す

【フランスの高校生との対話から】

「ようやく高校生になれた気がする」

「なんで困っているとか、違いについて質問するのは、いけないのでは？ と思ってたけど一緒に考えようと言うプロジェクトだったのがよかった。」

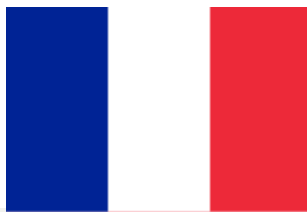
「小学校は中学校はといっしょに授業も受けてたけど、友達のグループに入っていたかと言えば、必ずしも入ってなかった。だから物理的にいるだけではなく、一緒にプロジェクトで本当の意味で、一緒になにかして、高校として参加したという意味で付加価値があった。」

「一緒に時間が居心地良かった。それが、『自分が高校生になれた』と感じる時間だった。」

将来への影響

「偏見があったかもしれない…普通に一緒に笑いたかった。相手の立場に立つ必要性を学んだ。」

「社会人になっても、お互いに助け合うきっかけになった」



「差別と不平等について」 の共同プロジェクト等

単に同じ部屋にいただけでなく、一つのテーマについて共に考え、想像するプロジェクトを実施。



対象校：
生徒数1,200名の総合学校



参加者：
通常学級の生徒＋障害のある生徒13名



連携：
DAME(医療・福祉チーム)のサポート

インクルーシブ教育とは 「支援を編集し続ける制度」

Goal : 「違う」ことが「分断」にならない社会。

Method: 学校を壊さず、外部資源で柔軟に補強する

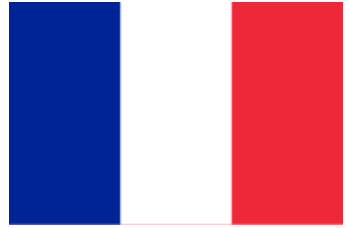
Result : 希望、アイデンティティ、そして誇り。

それは「やさしさ」ではなく、 社会システムの構造的な 再設計

インクルーシブ教育は、マイノリティのためだけではない。

未来の社会を設計するリーダーたちの「人間観」をアップデートする。

インクルージョンは、「善意」ではなく、障害のあることどもたちに平等に保障する「権利」



フランス紙 L'Écho Républicain (レコー・レピュブリカン) 1月10日掲載

DAME(福祉団体)の責任者 Arnaud Escrougnard 氏によると、
成功の鍵は何よりもマルソー高校との質の高い連携にあるという。
医療福祉専門職と教育職の共同による支援を受けている。

この仕組みはシャルトルでは4年前から実施されており、
国レベルでは15年以上前から存在している。

若者たちは安心し、進歩している

「若者たちは安心して過ごし、成長を続けています」と、
教育チームとの共同プロジェクトに触れながら、

校長 Emmanuel Abasa 氏は語る。

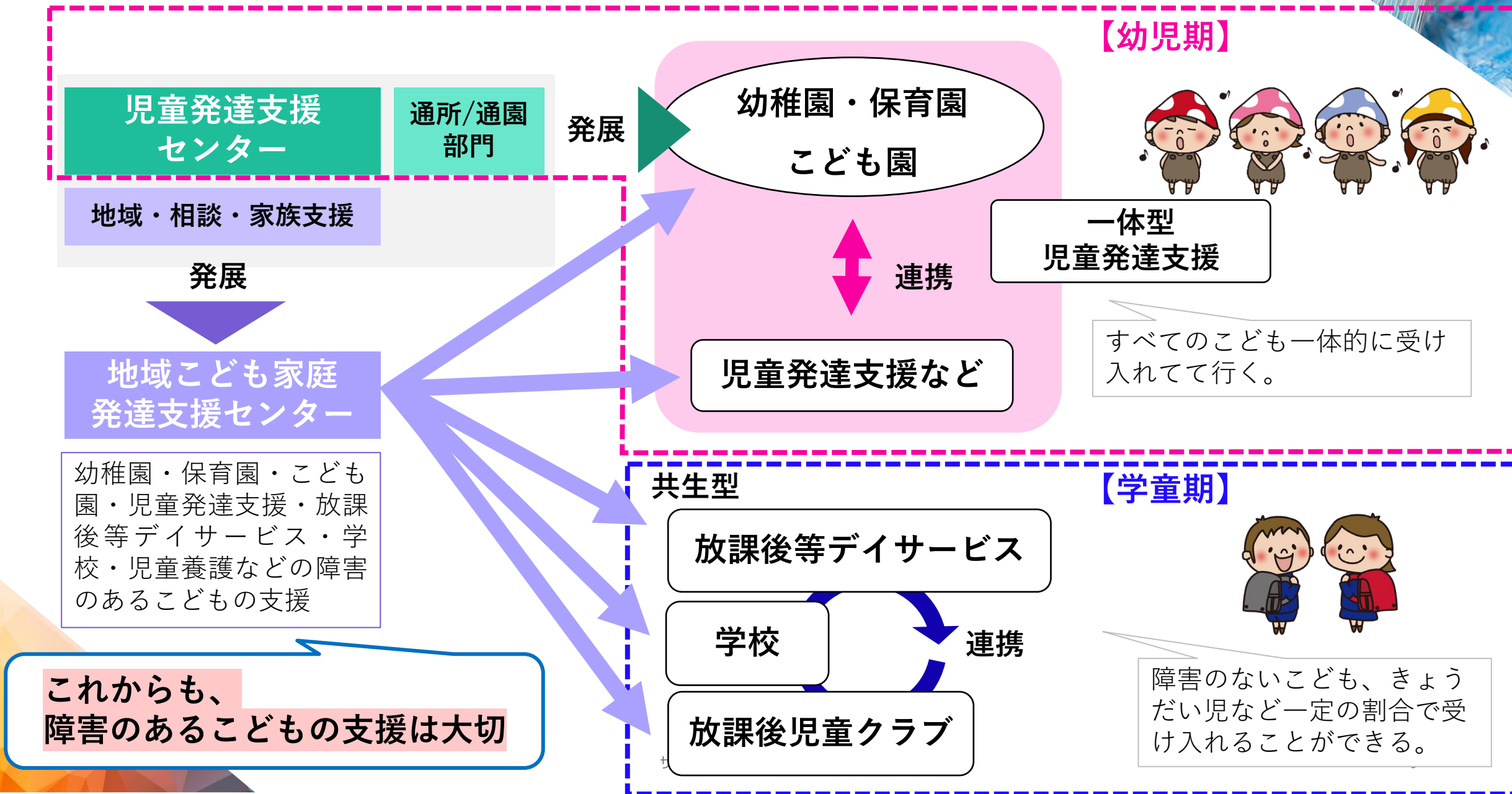
教育監督官 Pascale Grimon 氏は、
この県の目標は「すべての子どもが学校に通う権利を持つこと」

であると改めて強調した。



今後の在り方・体制整備・制度改革 未来予想図

「障害のある子どもと家族が安心して地域で暮らしていくための共生社会を目指して」



日本中どこに生まれても すべてのこどもや家族が 支えられる 共に生きる地域をつくる

すべてのこども分野の関係者が
手をつなぐことが
これまで以上に必要

幸せなこども時代のために
みんなが幸せに生きられる
社会のために

(公正で安心できる人間的な社会を築くことにつながる)

1人のこどもも例外なく、
生きる・学び・遊び・成長する機会を
対等な立場でもつこと





ご清聴ありがとうございました。